

ネットいじめの実態とその要因（Ⅱ）

教育学科教授 原 清 治 佛教大学非常勤講師 浅 田 瞳

抄 録

現在、子どもたちのなかでケータイ電話を介したネットいじめの問題が深刻化している。筆者を代表とする研究グループはこれまでネットいじめに関する研究を継続しておこなってきた。子どもたちの1割前後がネットいじめの被害に遭った経験があること、ネットいじめの被害と加害は強い相関関係がみられること、保護者のルール作りがネットいじめの被害を抑止していることである。

本研究で注目するのは、ネットいじめの被害の抑止となりえる保護者の意識である。本研究では、学校現場や教育委員会の協力を得て、保護者に対してインタビュー調査を実施し、これまでの調査において明らかとなった子どもたち

のネットいじめの実態を受けて、わが子のケータイやネット利用についてどの程度把握しているのか、保護者自身のケータイやネットに対する考え方に関する意識調査を実施した。

結果として、①厳格にルールを設けて子どもたちに勝手にケータイを使わせない保護者がいる一方で、②わが子のケータイやパソコンの利用用途を把握していない保護者が過半数を占めていたこと、③一部の保護者においては、子どもにネットやケータイに関する内容を教えてもらっていると答えており、彼らの家庭ではほとんどケータイに関するルールは設けられていないことが明らかとなった。

Ⅰ．学校をとりまくさまざまな問題の とらえ方とネットいじめの発生

現在の学校は、いじめ、不登校、学級崩壊、学力低下などのさまざまな難問を抱えており、早急にそれらに対する抜本的な対応が求められている。こうした問題の背景として、もっとも大きく論じられるのが、子どもたちの変化である。この問題に注目するとき、視野に入れておかなければならない点が2点ある。

第1には、そもそも子どもは、社会の変化に伴って変わるものであり、もう少し限定的に言えば、最近では、子どもをとりまく「家庭」と

「学校」などの主要な要素が変化することによって必然的に子どもも変わらざるを得ない状況となっていることである。したがって、子どもの問題をとらえようとすれば、それは、家庭や学校の変化やそこから派生する問題を論じなければ、その本質を見落とすことになる。

「家庭」と「学校」は子どもたちが心身ともに成長するためのいわば車の両輪のようなものである。しかしながら、現実には、親が学校に学習面だけでなく、「しつけ」などに類するような生活面のケアまでを求める傾向がみられる。すべてを学校に任せようとしている風潮は大き

な問題であり、学校の役割だけが肥大化していく元凶ともなっている。したがって、子どもの世界はますます「学校化」し、学校における価値観や序列がそのまま子どもたちのアイデンティティを形成するのであれば、子どもから社会的なモラルや規範意識が決定的に欠けていくのは必然といわざるを得ない。

第2は、子どもたちの変化という場合、変化した子どもとは、どのような子を指すのかという点である。それは、社会や大人の目から見た場合に、自分たちとは明らかに容姿や価値観が異質な子どものことであり、社会や学校においては、問題行動を起こす子どもを指す場合が多い。それは、表現を変えるならば、大人からみて理解や解釈ができない子どもたちが増加してきていることであるといえよう。

さらに、今日的な特質として、問題行動を起こす子どもたちは大人の価値観から異質と思われる子どもたちだけではない。「普通」とと思われる子どもたちにおいても問題行動が起こっているという現状についても目を向けなくてはならない。「普通」にみえる子どもたちの多くは、周囲や家族などから「いい子」であることをラベリングされ、本当の自分ではない「虚構」の自分を演じ続けてきており、それが、ちょっとしたきっかけで「キレた」ときに、問題行動としてあらわれる傾向が強いのである。それほど現代の子どもたちは、さまざまなストレスを感じており、どのような子どもであっても問題行動を起こしうる可能性を秘めているといえよう。

2007年、文部科学省はいじめの定義を「自分より弱いものに対して一方的に、身体的・心理的に攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」から「一定の人間関係のある者から、心理的・物理的攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」であり、「いじめか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行うよう徹底させる」と変

更した⁽¹⁾。しかしながら、いじめとは一口にいってもさまざまであり、その行為がいじめであるか否かを判別する基準もあいまいであると言わざるを得ない。したがって統計上の数値に挙がっているいじめは、あくまで教師などの第三者によって「発見」されたいじめであり、当事者以外の者からの「見えにくさ」をその特徴のひとつとする。

また、いじめの概念規定に関しては、いじめ側といじめられる側の「フレーム間の矛盾」も統計の信頼性に大きな問題を投げかける。つまり、初期の段階においていじめは、いじめられる側の主観的世界に基礎をおいた現象ではあるものの、いじめる側の動機にも目を向ける必要があった。それまでのいじめは、この2つが一致したもの、すなわち「加害者の側が、加虐的感情を込めた行為によって、被害者側が身体的・心理的苦痛を感じているもの」をいじめとして取り扱っていたが、実際にはこの両者は必ずしも一致するものではない。行為主体の動機のいかんにかかわらず、この行為を受けた客体の方が被害感情を抱くような場合や、その逆のケースも考えられるのであり、これらのケースはやはり概念規定上の制約から統計上の数字に現れない暗数となることが多いのである。

さらに、統計上の信頼性に影響を与えるものとしては、担任教師が、その「責任感」からいじめの事実を隠蔽したい、学校やPTAがこどもの進学や就職への悪影響を考慮した「教育的配慮」のよいじめ事実の否定、過少報告なども指摘せざるを得ないというのが実態であったろう。

それに対して、近年のいじめを見えにくくさせている原因をひとことでまとめるならば、一定の仲間関係のなかにいじめが入り込みはじめたことがあげられる。

それは、前述のような「フレーム間の矛盾」の延長線上に位置づけることもできよう。す

なわち、いじめる側といじめられる側によって、いじめの認識がズレるために、いじている側は「いじめとは思っていない」行為が、いじめられる側からは「いじめられたと思う」というようなことが頻発するのである。例えば「ジュースをおごってやるから、俺のも買って来い、といって2人分のお金を渡して使い走りをする」タイプの行為がこれにあたる。お金を出す（いじめる）側は、おごってやるのだから「いじめではない」と言い張るであろうし、ジュースを買いに行かされた（いじめられた）側は、いやなことを強要されたのだから「いじめだ」と考えるかもしれない。いじめのなかには、こうした認識のズレを巧みに利用して、「遊び」や「ふざけ」に偽装されているものが多く、それによっていじめの巧妙化や隠蔽化がさらに進んだという指摘もできる。（原、2009）

いじめ問題に関しては以上のようにさまざまな要因が論じられてきたが、その背景は多種多様であり、あるひとつの説に当てはまるいじめもあれば、複数の要因が重なっているものもあるため、その原因は簡単には判断できない。

これまでのいじめ研究を土台として、筆者を代表とする研究グループは現在、もっとも社会から注目を浴びているケータイ電話などを介したネットいじめの研究を進めてきた。インターネットの一般家庭への普及率が9割を超え、子どもたちが「生活道具」としてケータイを利用している姿はさして珍しい光景ではない。しかし、近年は友人関係の齟齬から起こるさまざまないじめが、インターネットの世界にも蔓延し始めている。私たち研究グループの調査結果では、小学生の10人に1人はネットいじめを「受けたことがある」と答えており、学年の上昇にしたがって被害の数も上昇していることは論を待たない（詳しくは拙書『ネットいじめはなぜ「痛い」のか』（ミネルヴァ書房、2011）を参照のこと）。

こうした事態に対処するため、政府は2008年6月に「青少年ネット規制法」を成立させ、未成年名義のケータイにはフィルタリングをつけることを義務化したが、これまでの調査から「フィルタリングをつけていない」と回答する子どもたちが一部存在した。

本研究では、これまでの研究対象であった子どもではなく、彼らにケータイを手渡す保護者を調査対象とし、わが子に対してどのような家庭での「ルール作り」を行っているのか、保護者自身のケータイに対する知識や認識はどの程度であるのかについて分析をおこなった。少しだけ結論を先に述べるならば、保護者自身のケータイやネットに対する認識には相当な温度差があり、とりわけ情報社会に対する「危うさ」を理解している家庭ほど、家庭での「ルール作り」を厳密に行っていたのである。

Ⅱ．調査の概要および結果

本研究では、A府・市教育委員会の協力を得て、市内に在住する小学生から高校生の子どもをもつ保護者253名に対して2010年10月から2011年3月にかけてインタビュー調査を実施し、子どもたちのケータイ利用の把握、保護者自身のケータイおよびインターネットに関する理解等について聞き取りをおこなった。

調査の概要は以下のとおりである。

それでは、保護者は子どもたちのネット利用についてどのように考えているのだろうか。ここでは、代表的なインタビュー内容から、わが子のケータイやネット利用についての保護者の思いを読み取ってみたい。

表3 保護者調査のサンプル

	n	%
男性	30	11.9
女性	223	88.1
合計	253	100.0

Q：お子様がケータイやパソコンを使ってどんなことをしているか、ご存じであれば教えてください。

A1：ヤフーのニュースや掲示板を見たりしているみたいですが、一番多いのはメール^①ですね。うちでは食事中にケータイを触らないことを決めています、それ以外の時間はかなり頻繁にケータイで文字を打っています。

A2：ケータイとにらめっこをしているのはよく見ますが、何をしているのかというとちょっとわかりません^②。

A3：たまに履歴（インターネットのアクセス履歴）を確認する^③と、勉強のサイトや好きなマンガのサイトを見ているようです。うちではパソコンにもケータイにもフィルタリングをつけているので、あやしいサイトにアクセスすることはできないと思います。

まず、子どものネット利用については、多くの保護者が把握していないことがうかがえた。下線部①やこれまでの調査結果からも明らかに、保護者も子どもたちが「15分ルール」に代表されるようなメールの送受信を頻繁に行っていると理解している。なぜなら、メールのやり取りは受信音が鳴るため、保護者も「うちの子はメールをしているな」と気付くのだが、学校裏サイトや2ちゃんねるなどのインターネットについては、インタビュー対象の多くの親が下線部②のように「わからない」と答えていた。今回のインタビュー調査では、全体の12%にあたる30人程度の保護者が下線部③のように「履歴からインターネットの利用を把握している」との回答を得ることができた。こうした保護者の特長として、子どもへのケータイの使用場所や時間を厳しく制限し、万一このルールを破った場合、ケータイを取り上げるといった徹底したルールを設けていることが多い

ことがあげられる。また、彼らはケータイのみならず、自宅のパソコンにおいてもフィルタリングをかけ、子どもたちが「危ない」サイトにアクセスできないように制限をしていると答えていた。それに対して、子どもがどのようなサイトに行くのか「わからない」と答えた保護者の多くは「子どもを信頼しているので、そんな危ないサイトには行っていないと思います」といった回答が見受けられた。一見子どもの自主性を尊重している回答であるが、近年のケータイを利用したゲームサイトは、子どもを「顧客」として捉えており、無料で遊べるゲームをしていたら、現実世界のお金を保護者のクレジットカード番号を入力することで支払っていたという事例⁽²⁾もあり、「わが子を信じている」という回答は大人の世界に無知な子どもを放置することにもつながりかねない点は指摘しておきたい。

Q：子どもがケータイやインターネットにアクセスすることをどう思いますか。

A4：正直あまりいい気はしません。ニュースでも物騒な事件が多くなっていますから。でも夜に子どもに何も持たせないで家を出ることにも不安があります。そうすると、やっぱり（ケータイを）もってもらう方が安心^④します。

A5：いいんじゃないですか。新しいものには子どもの方が早く慣れますし。うちでは、子どもにパソコンのことを教えてもらっている^⑤くらいです。危ないサイトがあるっていうけど、それはあの子たちが判断すればいいと思います。

A6：小学校では必要ない^⑥と思います。学校から帰ってきたら基本的に家にいるし、もし塾で送り迎えが必要なら塾に電話すればいいでしょう。わざわざ子どもを危険にさらすなんて、ちょっと考えられません。

A7：きちんと親が子どものケータイ利用を把握できている⑦のであれば、問題ないと思います。親が何も知らないのに、子どもに好き勝手をさせるのは危険だと思いますね。

保護者のインタビューでは、子どものケータイやネット利用に対する理解については大きく3つの意見に分かれた。ひとつめは下線部④のような子どもといつでも連絡を取ることのできる「安心感」である。とりわけ、この意見は小学生をもつ保護者に多くみられた。ケータイの所持年齢が通塾と相関するという調査結果からもわかるように、本当ならばあまり好ましくないかもしれないが、外にでてしまったわが子と連絡手段を取れることを重視したいという親の切実な思いが見え隠れしているといえる。また、中学生や高校生になると部活動やアルバイト等で外出する機会が増えるため、保護者としては連絡が取れることに越したことはないと考えているのではないだろうか。

次に、下線部⑤のように子どもにケータイやネットに関する知識を教えてもらおうとする保護者が一部見られたことである。一部の親世代にとってパソコンやインターネットはいまだに未知の領域であることが伺える。今回のインタビュー調査では、厳しいルールを設けている保護者ほど「家族ではなく、自分の所有するパソコンがある」と答えている。一方で、ルールを設けていない家庭ほど、「家族が所有しているパソコンはあるが、自分はほとんどさわらない」といった回答が多く寄せられた。ゆえに、ルールを設けていない保護者の家庭では、新しいことを吸収しやすい子ども世代が率先的にインターネットのことを知ろうとする傾向があるのではないだろうか。ケータイやパソコンの設定に子どもたちのほうが詳しいのであれば、彼らが「フィルタリングをはずしてほしい」と申し出たときに、親も「うちの子はとてもネット

に詳しいから大丈夫だろう」と考え、フィルタリングを外してしまうことが考えられる。実際に、インタビュー調査でも、「子どもの要望があったので、フィルタリングは外しました」と答える保護者が存在し、かれらのほとんどは家庭のルールを設けていなかったり、使用料金の上限を設けるのみといった状態であった。こうした親よりも先取りをしてネット世界に足を踏み入れる子どもたちがネットいじめの被害者となっているとするならば、「子どもにまかせる」親の姿勢には疑問が残るといえる。

最後に、ケータイ不要論者ともいうべき保護者の意見がある。下線部⑥のように、小さい頃からケータイやインターネットの世界に触れさせることはみずから犯罪やトラブルに巻き込まれるようなものであり、保護者である自分たちがそれを助長することなどあってはならないと感じており、前述した保護者とは対極の考えだといえるだろう。こうした意見を述べるのは、家庭に厳格なルールを設けている保護者であった。彼らはネットの世界の「危なさ」や「落とし穴」を十分理解しており、子どもが無防備な状態でネットの世界に踏み込むことを危惧している。ゆえに、わが子をそうした被害から守るために家庭でのケータイに関するルール作りが徹底しているのである。

それでは、ケータイやインターネットを利用する子どもに対して求められる保護者の姿勢とはどのようなものであろうか。それは下線部⑦のように、保護者が子どもの利用状況をきちんと把握することではないだろうか。親が子どものケータイ利用をきちんと把握していれば、いじめられたこともわかるようになる。危険なサイトを利用していれば、「そのサイトは個人情報情報が流れたり、知らない人と実際に会って犯罪に巻き込まれたりしていたから、利用することはやめた方がいい」と注意を促すことも可能だ

ろう。とくに、小学生の段階ではどのようなサイトが健全で、どのようなサイトが悪質かといった判断を下すことは難しい。そうした場合に、保護者が子どもたちの「目」となって情報社会の影の部分から彼ら彼女らを守ることが重要ではないだろうか。そうした意識が家庭でのネットルールを設け、子どもたちがネットいじめの被害者とならないことに有効であると考えられるのである。

Ⅲ. ネットいじめを抑止するために

ネットいじめは、他のいじめ以上に子どもの不安を煽り、自己の善悪の基準とはまったく異なった基準で判断をせざるを得ない状況に追いやるといった特徴がある。自己矛盾する判断は被害者のみならず、場合によっては加害者の子どもたちの心を傷つけ、苦しめることにつながる。

ネットいじめは、どこか非現実的な世界で起こり、不特定多数による攻撃が子どもたちを苦しめている、と世間一般では考えられている場合もあるが、本調査の結果を鑑みてもそれはまったく事実と異なる解釈だと言わざるを得ない。ネットいじめの多くは、比較的身近な距離にいる友人からである。われわれは、ネットいじめを「仮想空間で生起している」出来事ではなく、直接的に行われる「現実世界でのいじめ」と認識し、その解決に取り組まなければならない。

それでは、こうした常に他者の様子をうかがい、その状況を判断して適切な態度を取ろうと振る舞う子どもたちに対して、我々はどうのような教育を行えばよいだろうか。

子どもたちは「いじめはいけない」、「これをしたら相手は嫌がる」といった軸がきちんとあり、けっして善悪の判断がつかないために相手を攻撃している子どもはごくわずかである。したがって、単純に「情報モラルを身に付けさな

くてはならない」、「携帯の使い方を教えなくてはならない」といった指摘が見受けられるが、モラルや使い方を教えても、大半の子どもたちはそれをすでに理解しており、むしろ、なぜモラルや使い方を知っているにもかかわらずネットいじめを抑止できないのかという部分に注目すべき時期なのである。

先述したモラル教育とともに「ネットいじめやトラブルから回避するためには携帯をもたせなければいい」という議論がみられるが、本調査からも明らかなように、たとえケータイ電話を持たせなくても、子どもたちはさまざまなツールを用いてインターネットやメールを駆使し、ネットいじめの被害を受けている。多くの家庭ではパソコンがあり、子どもたちが遊びに用いる携帯ゲーム機のなかにもメールやインターネットなどができる通信機能をもつ機種がある。したがって、ネットいじめはケータイの所有の有無に限らず遭遇する危険性を大きく内包している。したがって、携帯の所有やネット制限については効果が薄いと言わざるを得ないだろう。

われわれ大人は周りの状況を絶えず読み取り続ける子どもたちに何ができるだろうか。ネットいじめに限らず、いじめが発生した場合、問題の解決にあたることは当然であり、モラル教育も予防的知見から必要であろう。しかし、もっとも必要なのは、そうした困難に巻き込まれる、もしくは巻き込まれそうになったとき、正しく判断することと受け流すことができる力ではないだろうか。

この2つの力を育てるために、ひとつはストレス耐性を向上させるプログラムを実施することが有効だと考えられる。学校現場においては、ストレスを軽減させ、回避させるといったプログラムが多く実践されるようになってきている。しかし、人はそれぞれ価値観が異なるため、簡単に「みんな仲良く、お互いを受け入れよう」と

掛け声をあげても同調することはまれである。

ゆえに、違った価値観をもつ人間とも付き合えるという類のストレス耐性が求められている。ストレスをコップの水に例えると、小さなコップではすぐに水があふれ出てしまうが、大きなコップだと多少の水だとあふれ出ることはない。つまり、われわれが子どもにできることは、ストレス状態に耐えることができる大きなコップをつくる、つまりどのような人と接する場合でも、相手を貶めたり排除するのではなく、相手を受け入れる寛容な態度を育てることではないだろうか。

自分と「異なる」他者に対して、子どもはいじめの刃を向ける。それは藤川大祐（2005）の指摘する「同調圧力」⁽³⁾が小学生の子どもたちの人間関係を規定している典型例であろう。メールのやりとりや学力の違いなどによる「同調圧力」にさらされたとしても、それを受け流す力をもつ子どもの増加は、インターネット上で吹く風にも流されず、ネットいじめを減少させることができるのではないだろうか。

こうした取り組みは小学校のみならず、家庭生活のさまざまな場面で作り上げる必要がある。われわれ大人は、子どもたちを状況が変わっても自分の意志や相手の見方を変えない子どもたちを育てていかななくてはならない時期に来ているのではないだろうか。

【付 記】

本研究は財団法人電気通信普及財団一般研究助成（2011）年「ネットいじめの実態とその抑止策に関する実証的研究」（研究代表者：原清治）、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（c）（2009～2011）年「ネットいじめの実態とその背景となる要因に関する実証的研究」（研究代表者：原清治）および佛教大学特別研究費（2009～2010）年を受けて行っている研究成果の一部であり、日本実践教育学会第14回大会（2011. 11. 6、於：佛教大学）および関西教育学会第63回大会（2011. 11. 13、於：近大姫路大学）における発表をもとに加筆修正したものである。

なお、本稿はⅠ、Ⅲを原が、抄録、Ⅱを浅田が担当したが、その責任は両者が等しく負うものである。

【注 記】

- （1）文部科学省「平成21年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2010
- （2）2011年10月25日読売新聞記事より（<http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/news/20111024-OYT8T00785.htm>）
- （3）藤川大祐『ケータイ世界の子どもたち』講談社現代新書、2005、pp. 94～121

【参考文献】

- 荻上チキ『ネットいじめ』PHP新書、2009
 香山リカ、森健『ネット王子とケータイ姫』中央公論新社、2004
 京都市教育委員会『京都市「ケータイに関するアンケート」について』2007
 『現代のエスプリ 2008年7月号』至文堂、2008
 『現代のエスプリ 2011年5月号』至文堂、2011
 国立教育政策研究所「いじめ追跡調査 2004～2006」2009
 小林正幸『なぜ、メールは人を感情的にするのか？Eメールの心理学』ダイヤモンド社、2001
 渋井哲也『学校裏サイト 進化するネットいじめ』晋遊舎、2008
 下田博次『学校裏サイト』東洋経済新報社、2008
 鈴木謙介『カーニバル化する社会』講談社現代新書、2005
 住田正樹『子どもの仲間集団の研究』九州大学出版会、2000
 総務省『情報通信統計データベース』2009
 田中美子『「いじめ」のメカニズム』世界思想社、2010
 土井隆義『友だち地獄』ちくま新書、2008
 富田英典『インティメイト・ストレンジャー—「匿名性」と「親密性」をめぐる文化社会学的研究—』関西大学出版部、2009
 富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界—若者たちの東京・神戸90's[展開編]』恒星社厚生閣、1999
 原清治『若年就労問題と学力の比較教育社会学』ミネルヴァ書房、2009
 広田照幸編『若者文化をどうみるか？』アドバンテージサーバー、2008
 藤川大祐『ケータイ世界の子どもたち』講談社現代

新書、2005

宮台真司『日本の難点』幻冬舎新書、2009

森田洋司・清永賢二『いじめ—教室の病い』金子書
房、1994

文部科学省「平成 21 年度児童生徒の問題行動等生徒
指導上の諸問題に関する調査」2010

文部科学省『青少年が利用する学校非公式サイトに
関する調査報告書』2008

渡辺真由子『大人が知らない ネットいじめの真実』
ミネルヴァ書房、2008